

武器の使用を嚴禁し、其他種々煩瑣なる手續を設けたる處あり、例へば眞心影流にありては、

最初取替候一札として

稽古磨き爲めの試として立合申候上は勝負の善惡によりて意趣意恨の發決して有之まじく候萬一心得違等にて口論仕掛け候方片落之御取捌に何方迄も諸親類一同相願可申候
右之趣御互に相守り日本の神以聊も被申間敷候仍知件

と云ふが如き一種の起請文様のものを取替し、其他種々の盟約の下に漸く此を許したり。他の各流亦略これと同一の手段を以て一般に他流試合を避けんとせる傾向あるを免れざりき。

紹介

圖書

●日本の佛教

境野真洋著

日本の佛教の概観に資せんがために、著者がさきに編輯發行したりし「佛教叢書録」の跡に依りて、平易簡易に敘述せられたるも

のなり。即ち佛教の傳來より鎌倉時代の佛教に至るまで章を分つこゝ八章、鎌倉時代以後の事項は其以前の關係事項の下に含めて説述するに力めたり。其第一章「日本佛教傳來の年」に於ては、欽明十三年以前に早く佛教の傳來したりとする諸種記録を蒐め、之れの考證批判をなし、「法王帝説」の記事なる欽明戊午の年を攷究して、書紀の紀年を訂して、之れを欽明帝在位の七年に該當せしめ、佛教の百濟より公に傳來したる年とせる等は著者の篤實なる研究態度を見るべし。第二章「造寺と造像」に於ては佛教傳來後の造寺造像の狀況を述べ、其中には聖德太子建立の寺院數につき、二十一寺、又は九院、七寺、五寺等の説あるを其一一について考説し、第三章「聖德太子及び大寺の由來」に於ては太子の事業等をも説き、以下「東大寺國分寺の建立」「南都の六宗」「平安朝新宗教の勃興」「叡山東寺の佛教大勢」等の各章に於て奈良、平安朝の佛教の大勢、又各宗の教祖、其門下龍象の事蹟事業等を概言し、「鎌倉時代の佛教」に於ては、淨土教、禪宗、日蓮宗に就いて簡易に其教義と寺院の興隆等を述べたり。其間議論の件不所のもの、多く之れを避けたるも、只卷末の章鎌倉時代勃興の新宗派の歴史を叙する所は、稍々簡に過ぎ、初學者の方に聞くべき處の當遺されたる如き洵あるものありと雖、尙、著者が佛教史の研究家として從來世に關わたる著作と相關連して、初學者にとりて又日本

佛教と其歴史に關する便利なる一般の讀物たるを失はざるなり。

(丙午出版社發行、價、一、〇〇)(西田)

●日本歴史圖錄 第四、五、六、七輯

其後發行せられたる本圖錄第四輯には、英國公使館浪士亂入圖の原色版を初めとして、上古の甲冑、聖德太子御像、百萬塔陀羅尼、賀茂神社、僧兵等あり、第五輯には鎌倉時代の旅行風俗を石山縁起より採りて彩色版させる外、寫眞版には、齋瓮土器の諸種の標本的なるもの、法隆寺圖、奈良朝武器等のあり。其他彫刻にても、東大寺大南門の二王尊、運慶造慶木像等あり。近世に關しては後水尾、後光明兩帝の尊影を初め、光琳、宣長等の作品著述等あり、第六輯には、慶長頃風俗の彩色木版以下榎原神宮、伊勢神宮、古墳圖、楠木正成、足利尊氏、山田長政に關するもの等、第七輯には、蒙古裝束圖、鑑眞、菅原道眞、探幽、幕府遺歐修好使に關するもの、其他上古裝飾品、腹當、釣燈籠の如きあり。本圖錄が發刊以來每輯、常に國史の各時代と各方面に亘りて汎く其材料を採擇し來れるは、當に學校に於ける國史教授の參考書なるのみならず、一般歴史趣味の涵養に資するところ大にして、編者の努力は多きべきものあり。(歴史參考圖刊行會發行、會員頒布)

第三卷 紹介 圖書

●通歴七卷 唐 馬總撰

●續通歴五卷 宋 孫光憲撰

この兩書は其名世に著聞すれども傳本少くして史家の常に憾みさせしものを、近年葉氏夢繁繼にて排印せるものにして、通歴はも三十卷あり、天皇氏より隋季に至る迄の本紀を略纂し、粗く其君の行迹賢否を述べ、且つ虞世南の史論を各篇末に分系して其義を見はせるものなるが久しく其初三卷を缺きて西晉以後の七卷を存し本書亦然り。記事多く正史より抄撮せるものにて通鑑の先驅をなせども、其淹貫博瞻固より彼に比すべくもあらず。但し梁武帝傳は史鈔の今に存する者此書を最古とし、虞氏の略論も大抵散佚せしに此に賴りて尙梗概を知るを得べし。此書遂の頃迄盛行せしが後多く傳はらずして四庫全書にも之を收めざりき。續通歴は唐高祖に起り閔王審知に至る。初め十卷ありしか。記事頗る實を失せしを以て宋太宗詔して之を毀たしめたりといふ。今存する所五卷にして何れの部を削除せしが不明なれども猶唐及五代の大勢を録す。その五代の部は主として薛書に依れるが、乾隆中永樂大典より薛史を抄輯せし時數篇全く亡びたるを本書にて補足せりといふ。

第一號 一四七 (三三三)